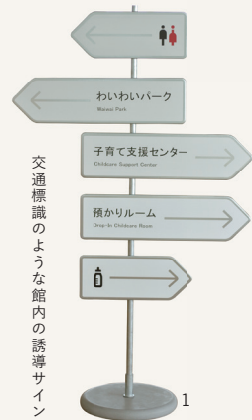


tetteの歩き方

Interview 色部義昭さん



インフォメーションのデザインの役割とは、案内人みたいなものです。バラバラな人が案内しているところの人を信頼したらいいかわからなくなるけれど、統一することで、一つ一つの情報も信頼感がもてて、すっきり館内も統一、誘導もスムーズになる。文字やピクトグラムにはキャラクター性も込められるので、館内全体の雰囲気を作ることができます。tetteは新しいイベントや図書の分類など、常に情報が更新し続ける施設なので、フレキシブルに対応できるサインを作る必要がありました。デザイナーがその都度デザインするわけにもいけないので、現

創ったものが語り出す声に耳を傾けて

場の方々が更新できる仕組みで統一感と品質を保てる工夫が必要でした。難しい条件だからこそ挑戦してみたいと思えました。今回はロゴを最初に考え、ロゴを起点に他のデザインを考え、ていきました。tetteという名前だったたり、図書館のオープンな状況や建物の内部の使われ方やフロア構成から考えて、とにかく目立つデザインにしようと思いました。サインを交通標識のようにというアイデアは、最初からありましたね。○や□のフレームはあくまで、サインのシルエットでしかなかったのですが、いつのまにか漫画の吹き出しのように色々なことを語り出していった。はじめは、私たちが作ったものですが、デザインは関係性で育っていくもの。サインが自分から拡張していつているような気がして、今後どんな風に育っていくのかも楽しみです。

1.矢印型のデザインを導入して一目でみてどちらの方向にいけばよいかわかる。 2.地面に立っているtetteのロゴは、市民と地続きの関係性を。座っても◎。 3.施設内の様々な活動に対応する更新性のあるサインにはホワイトボード塗装を。 4.11種類のカラーパリエーションを展開したエリアサインと同色の円形サイン。

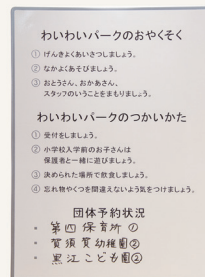


正面玄関でtetteがお出迎え

書架のサイン



更新性のあるサイン



3



日本デザインセンター、色部デザイン研究所主宰 色部義昭
グラフィックデザイナー／アートディレクター。tetteでは、目印と矢印をつくるひと。最近では草間彌生美術館のロゴやサインも。

かえりたくなる街のつくり方を考える

Interview 市民協働チーム

須賀川の宝は“人”
人と人が出会う場所へ

人口の過疎化や若者の地元離れは、どの地域も抱えている悩みのひとつで、須賀川も例外ではありません。初めて訪れたのは、平成26年の1月。東北本線須賀川駅から街の中心部までは徒歩約20分、タクシーでは5分もかからない距離ですが、その間、歩いている人の姿をほとんど見かけなかったことが印象に残っていました。

基本設計を策定する段階で行われたワークショップで、市民の意見から反映された施設の機能が決まった後、複合施設のそうした機能が開館してから具体的にどのように利用されていくべきなのかを、見える化するところが課題でした。そこで、市民の方々と一緒に考えていくワークショップを、合計8回企画開催。(平成26年～28年)

企画をするにあたって常に考えてきたのは、「かえりたくなる街」とは、一体、どういうもの

なのか、ということ。

須賀川市の広域地図を机に広げて、参加者の生活行動やその範囲を地図に書き込み、そこから、各フロアを利用するヒントを探ったり、個々人が得意とする活動と施設機能を掛け合わせいく仕組みづくりのアイデアも出てきました。また、「音楽」「食」「場づくり」「プレイヤー」「映画」を切り口に、プロフェッショナルなゲストの方々を迎えたシリーズでは、ゲストの経験を共有させてもらいながら、須賀川だったら、どんなことが出来るのかを考えていきました。また、須賀川に既にある、人や街の魅力をもっと見える化し、活動や地元に興味を持ってもらいたいとPR冊子「すかがわ、めぐるめく」(後述)の制作をスタートさせました。こうして見えてきたアイデアや価値が、つながら実現化されるのは、まさに、これからです。初めて知り

合ったひと同士が、同じ机でアイデアを出し合ってきたこのワークショップのように、開館後も、tetteで初めて出会う人同士が、同じ時間を共に過ごしていくことで、施設の可能性を広げていくてくださることを期待しています。須賀川は、私たちにとっても「かえりたくなる大好きな街」になりました。



株式会社
スティールウォーター
東京を拠点に女性4人で活動するクエリエイティブコンサルティングチーム。本誌「すかがわ、めぐるめく」の企画制作も担当。